平成 28 年度 大学職員情報化研究講習会

基礎講習コース研修報告

地域のワクワクから学生のイキイキへ

～「地域貢献」をキッカケとした主体性向上計画～

D2 班　Ah-a！浜名湖

1.　テーマ選定理由

(1) 大学の役割

大学の役割は三つに大別される。まず一点目は、人材育成である。大学は社会に出る前の最後の教育の場であることから、主体的に判断し、多様な人々と協働できる力を育成することが求められる。同時に、大学は学生本人の自己実現の場でもあることから、将来へのルートを提示し、進路に迷う学生を導く役割を担っている。

二点目は研究である。社会貢献として、国力の増強として、社会をより豊かにする研究が求められる。そのためには、大学相互の協力関係、産学官の連携による研究及び情報開示が必要となる。

三点目は地域貢献である。地域によって大学が果たすべき地域貢献は異なるが、若者が集まる場として地域に安心感を与える、経済を活性化させる、ゼミ活動等を通して地域を元気にするなどの役割を担っている。

(2) 大学の現状

人材育成においては、リーダー的人材の不足、語学力の不足、就職率の伸び悩みという現状がある。なにより、何をしたいかわからない、どうすれば良いかわからない、という学生の主体性の欠如が問題である。研究および地域貢献は、地域や大学によって目指す形や取組に大きな差がある。一方、「学生に主体性を身につけてほしい」という人材育成の問題意識は、すべての大学において共通している。

そこで、グループ討議では人材育成を取り挙げ、テーマを「地域のワクワクからイキイキへ～「地域貢献」をキッカケとした主体性向上計画～」と設定した。

2.　問題点の深堀

本来、主体性は学生自身が自ら身につけるものである。しかし、消極的で視野の狭い学生は、学生生活を目的のないままに過ごし、卒業し、社会に出ても自ら行動することができない。そこで、大学が早めに学生に働きかけ、主体的に取組むキッカケを提供することが必要である。

大学としてできることは、キッカケを授業において提供することである。そこで、大学の役割の一つである「地域貢献」のプログラムを、必修授業として取り入れることを提案する。まずは地域に目を向け、学生の社会への視野を広げる。その後は学生自身が、地域貢献、海外、研究と、自らの興味によって世界を広げていく。

3. 解決策の検討

大学が役割を果たす上では、3 つのポリシーの周知が重要であり、大学はカリキュラムマップを明示しなければならない。そこで、「学生主体の地域貢献プログラムの策定」を検討した。

(1) 4 年間のプログラム

まず 1 年生では、必修としてグループでの地域貢献プログラムを行う。市場調査からテーマ設定、企画、実行、反省・解決までを、学生が行うことにより、積極性及び協働する力を育む。同時に、大学生活を通して役立つ、市場調査や文献調査などの ICT を用いた情報収集方法を教示する授業も必修として取り入れる。1 年生での必修授業を通し、消極的な学生を積極的に変えるキッカケを提供する。

次に 2 年生では、必修として 1 年生のときに行ったプログラムを個人で行う。分担し相談しながら進めていた作業を、すべて個人で行わなければならず、1 年次と比べて個人の責任が重くなる。その分、1 年生での失敗や経験を生かし、自ら考え行動することで、達成感・自信に繋がる。2 年生での必修授業を通して、学生は自らの主体性に気付き、行動できるようになる。

3 年生では、選択として、1 年生のプログラムをサポートする授業を取り入れる。また、自らの研究に専念する、留学に行くなど、各人が興味のある方向に分かれていく。そして 4 年生では、それまでの経験を生かし、卒業論文や卒業制作に取組む。将来の進路を決定する上でも、自ら情報を収集し分析し選択する、という能力は生かされる。

(2) 職員の役割

このカリキュラムにおける職員の役割としては、まず、事前の地域との調整があげられる。地域が協力的ではない場合、情報公開を徹底し、職員が事前に住民へ説明を行うことで、授業の土台を作る。次に、授業における学生のサポートがある。大きな失敗による学生の自信喪失も予測されるため、教職員が随時フォローし、失敗を次に生かす方法を教える。また、先生が協力的でない場合は、職員が積極的に動くことで、興味のある先生を中心に授業を構築していく必要がある。最後に、データベースの構築があげられる。プログラムを継続していくことで、ICT を用いて学生の収集したデータを蓄積することができ、過去のデータを学生に提供することで、地域にとってより良い活動を行うことができる。

(3) イノベーション

地域貢献プログラムを行うことで、主体的な人材を育成し、地域からの大学への信頼が育まれる。それにより、更に地域貢献プログラムがやりやすくなり、多様な人材を育成することができ、地域だけでなく社会からの大学への信頼を育むことができる。こうした好循環を回すことが、大学のイノベーションとなる。

以上